

氏名	サイトウ ケイタ 斎藤 敬太
学位の種類	博士（日本語教育学）
学位記番号	人博 第127号
学位授与の日付	平成30年3月25日
課程・論文の別	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	東北地方の外国人住民の日常生活における方言理解問題の解決を 目指した社会言語学的研究
論文審査委員	主査 教授 ロング ダニエル 委員 教授 西郡 仁朗 委員 准教授 阿部 貴人

**【論文の内容の要旨】**

## 1. はじめに

日本国内には 2016 年 6 月現在で 2,307,388 人の外国人が居住しているが、少子高齢化なども考えると、看護や福祉の分野も含めて、就労などのために日本でくらす外国人が今後ますます増加することが予想される。外国人が日本へやって来る際に大きな壁となるものの一つが「ことばの問題」であるが、その中でもとりわけ「方言の問題」というものが大きい。標準語を学習していれば日本では問題なく生活が可能だと思われがちであるが、年代を問わず方言話者が比較的多く存在するような地域では、話す分には標準語で通じても、地元住民が必ずしも標準語で話すとは限らず、方言で話された際に理解できるか否かがコミュニケーションに関わってくるということも少なくない。本研究では、そのような地域の一つとして東北地方を取り上げ、東北地方の外国人住民の方言理解に関する諸問題に関して考察したのち、外国人住民向けの方言理解支援ツールを作成した。また、方言理解支援ツールで作成した多言語翻訳を用いて東北方言と諸言語との対照研究を行うことで、各言語における翻訳上の問題点が異なることを明らかにした。

## 2. 本研究の構成及び目的

本研究の構成は、以下の通り 4 つの部に分かれている。

### 第 1 部 序論

#### 第 1 章 はじめに、第 2 章 先行研究

### 第 2 部 方言理解支援ツール

#### 第 3 章 言語環境調査、第 4 章 日本人の方言使用調査、第 5 章 外国人の方言理解調査、

#### 第 6 章 方言理解支援ツール

### 第 3 部 対照研究

第 7 章 英語への翻訳上の問題点、第 8 章 中国語への翻訳上の問題点、第 9 章 韓国語への翻訳上の問題点、第 10 章 インドネシア語への翻訳上の問題点、第 11 章 ポルトガル語への翻訳上の問題点

### 第 4 部 終論

#### 第 12 章 おわりに

以上をより詳しく示すと、次ページの構成マップの通りになる（図 1）。

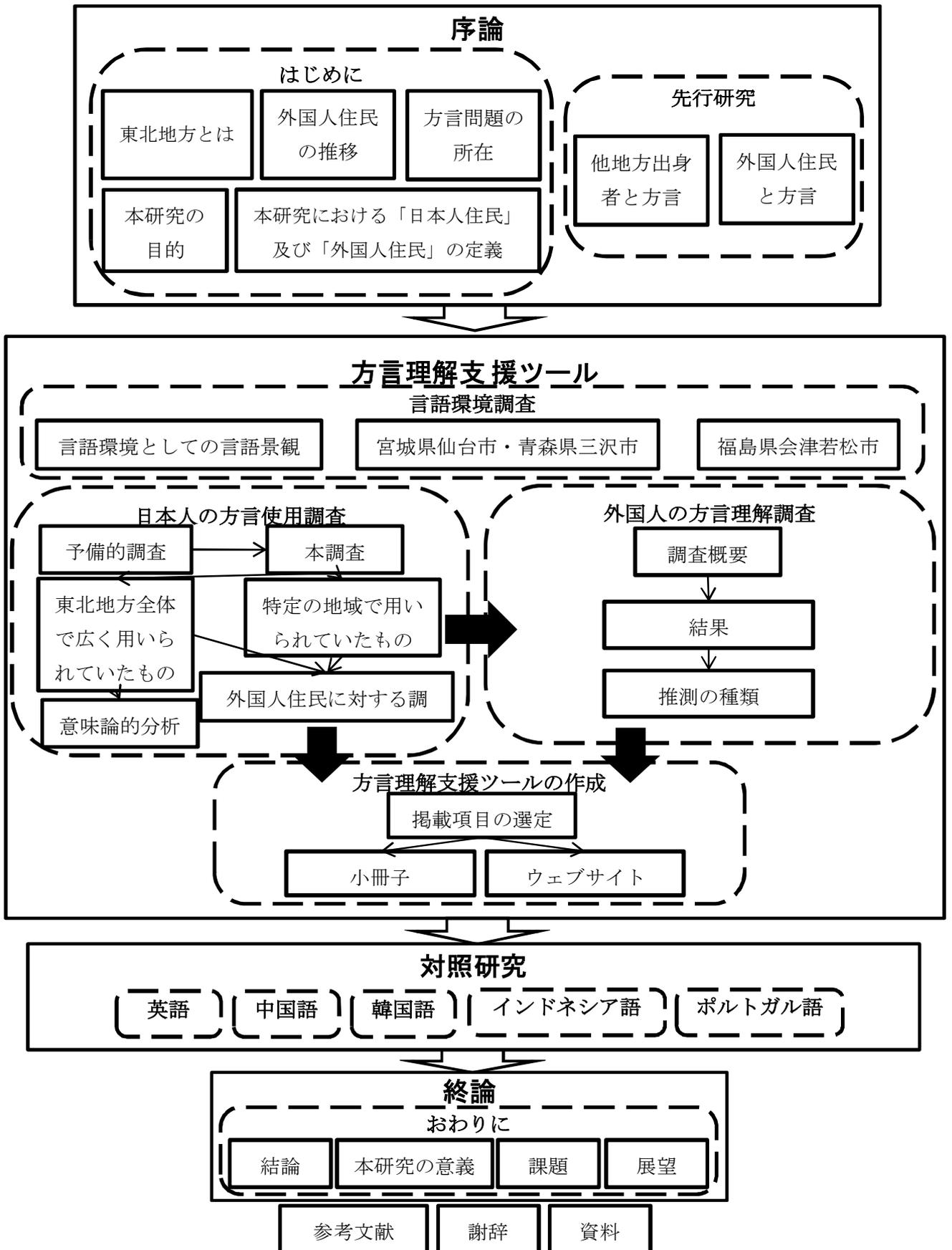


図1. 本研究の構成マップ

各部及び各章について簡潔に説明する。

「第1部 序論」には、「第1章 はじめに」及び「第2章 先行研究」が含まれる。ここでは、本研究の位置付けを示した。

「第2部 方言理解支援ツール」には、「第3章 言語環境調査」「第4章 日本人の方言使用調査」「第5章 外国人の方言理解調査」「第6章 方言理解支援ツール」が含まれる。第3章では外国人住民の言語環境としての言語景観を取り上げ、東北地方で普段目にする看板に方言が見られることを示した。第4章では、東北地方の日本人が実際にどのような方言を使用しているのかを調査した。その中で、各項目の使用域だけでなく、方言の意味論的な各事象についても述べた。第5章では、東北地方の外国人がどの程度方言を理解できているのかを調査した。その中で、理解している方言だけでなく、知らなくても推測で分かってしまう方言についても明らかにした。第6章では、前章までの結果を踏まえて、方言理解支援ツール『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』を作成した際の語彙選定方法等について述べた。また、方言集の構成や特色についても記した。

「第3部 対照研究」には、「第7章 英語への翻訳上の問題点」「第8章 中国語への翻訳上の問題点」「第9章 韓国語への翻訳上の問題点」「第10章 インドネシア語への翻訳上の問題点」「第11章 ポルトガル語への翻訳上の問題点」が含まれる。方言理解支援ツールにおいて東北方言の解説・例文翻訳をするに当たり、各言語との間で様々な意味論・あるいはそれ以外の問題点が明るみになった。各章では、それぞれの言語と東北方言との対照研究を行い、各言語にどのような方言項目でどのような問題が起こり得るかについて詳細に述べた。

「第4部 終論」には、「第12章 おわりに」が含まれる。ここでは、本研究の総合的な結論、及び今後の課題について示した。

### 3. 結果のまとめ

以下、各章で示したことや明らかになったことについて要点を述べる。

第1章では、方言問題の所在について方言の特徴から明らかにし、また方言使用と方言理解といった点について言及することで、本研究の目的を明確にした。また、本研究で用いる各用語の定義を行った。

第2章では、先行研究をまとめることで、これまでの研究では外国人住民よりも外国人留学生に関するものが多い点や特定の場面に限定したものが見られた点などを示し、それらとは異なる本研究の位置付け、及び方向性を示した。

第3章では、言語景観を通して、外国人の言語環境について考えた。その結果、

- ①方言景観は仮名表記が多く、外国人住民にとって読みやすい
- ②東北地方でも方言景観がほとんど見られない地域が存在し、そのような地域では話し言葉としてもあまり方言が聞かれないか、あるいは聞いていてもさほど問題になっていない

また、会津地方における言語景観調査では、

- ③大河ドラマによる方言景観の増加は一時的・流行的なもので終わってしまうこと
- ④観光事業のキーワードとして「会津」を押し出すことで南会津方言域でも観光方言としての会津方言の方言景観が進出していたり、「福島県」が一体となった方言エールを発する際は復興方言として一種の「福島県共通語」が使用されたりしていること
- ⑤方言景観の会津方言に見られる尊敬命令形としては、従来最も待遇度の高い“-ahaNsjo”系が「おわいなはんしょ」を例外的に残すのみで使用されず、その次に高い“-aNsjo”系がほとんどを占めていること

以上が明らかとなった。

この章では、方言景観を出発点に、実際に話されていることばにまで踏み込んで調査をした。東北地方では、外国人住民が目にする方言景観が、一部を除いては彼らの言語環境を形成しており、そしてその方言景観は、実は彼らが耳にする方言とも関連があるということが確認できた。

第4章では、東北地方でくらす外国人住民が普段の生活で耳にしそうな方言を収集するため、日本人に対する方言使用実態の調査を行った。その結果、

- ①東北全域に広く用いられている方言が多く存在すること
- ②広く用いられているものでも、意味拡張や意味推移によって意味に地域差が生じている場合もあること
- ③各地域のみで用いられる方言も存在すること
- ④外国人住民は日本人が「使う」「聞く」とした方言を実際に耳にしていること

以上が明らかとなった。このように、日本人住民の言語使調査から、現在の東北地方の日本人住民がどのような方言をどのような地域において使用しているのかを浮き彫りにした。

第5章では、第4章の結果を踏まえて、実際の会話を想定した音声を聞かせて、そこに含まれる方言について質問する外国人住民の方言理解調査を行い、東北地方の外国人住民が、現時点においてどれほどの方言を理解しているのかを検証した。その結果、「なげる（捨てる）」「おばんです（こんばんは）」「んだ（はい）」のような東北地方全域で用いられているものや、秋田県の「がっこ（つけもの）」や福島県の「さすけねー（大丈夫だ）」などの各地の代表的な方言については知られていることが少なくないことが明らかになった。また、数の多少はあれど全てのインフォーマントにおいて推測で正答したものが現れ、推測には「標準語」「共起」「文脈」「パラ言語」などの要因が明らかとなった。外国人住民が実生活において遭遇する方言は単語だけでいきなり出てくるというよりは、文で出てくるものがほとんどであり、それ以外にも会話相手がいる以上、共起する表現や前後の文脈、パラ言語など

様々な推測を促す要素が隠れているということについてもこの章で示すことができた。

第6章では、方言理解支援ツール作成までの過程を記した。掲載語彙の選定においては採用基準として「日本人住民の使用頻度」「外国人住民の理解度」「東北全域で用いられるもの」「地域特有のもの」「急を要する際に用いられる可能性のあるもの」を、除外基準としては「推測可能なもの」「ジェスチャー・指差しなどで指示可能なもの」などを設定した。これらから118項目の方言を選定し、方言理解支援ツール『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』を、CD付き小冊子版（図2）とウェブサイト版で作成した。



図2. CD 付き小冊子『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』

小冊子版では、見出し語はひらがな表記とし、その意味や例文を掲載した。県ごとではなく五十音順に載せており、どの地域で使われているかの分布図で使用地域が分かるようにした。A5 版 76 ページ（見返し含む）、標準語のみならず英語・中国語・韓国語・ポルトガル語・インドネシア語による訳を併記した。また、多くの項目には方言の意味を捉えやすいようにイラストも載せてあり、上記の言語以外を母語とする外国人住民にも標準語とイラストを併せることにより理解を深められるよう努めた。付属の CD には青森県津軽方言、岩手県伊達方言、秋田県秋田方言、福島県会津方言を含む99トラックの例文の音声を収録した。

小冊子版は持ち運びやすいように A5 判というサイズにしたが、スマートフォンなど電子機器の発達により、インターネット上で容易に閲覧可能なウェブサイト版（<http://saitokeita.web.fc2.com/hougenshu>）も作成した。ウェブサイト版では、方言集の PDF 版のダウンロードが可能になっており、また、方言集には掲載しきれなかった例文の多言語訳（英語・中国語・韓国語・ポルトガル語・インドネシア語）なども閲覧できる。こちらは冊子版と違い、常に方言項目の追加・修正、及び新たな機能の追加等の更新が可能である。

第7章から第11章までは、『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』で掲載した各言語への翻訳上の問題点について考察した。第7章では英語訳を作成した際の様々な翻訳上の問題点を明らかにした。「I 意味論的問題」には東北方言「あんべわり（体調が悪い、都合が悪い）」と英語“feel bad, sick”及び“inconvenient”の関係に見られるような「I-a. 方言のほうが英語より意味範疇が広い」もの、英語における可能“can”では区別されない能力可能と状況可能が、東北方言では状況可能「～える・～いる」を用いて能力可能と区別するという関係などに見られる「I-b. 方言のほうが英語より意味範疇が狭い」もの、東北方言「～がね? (～いかない?)」のような「～(て)いく」といったニュアンスの英語の表現がなく、説明的な翻訳になるという例に見られる「I-c. 英語に適切な語がなく説明的になる」ものの3つの場合が存在し、その他にも「II 意味論以外の問題」として「II-a. 発音規則」「II-b. 語順」「II-c. テンス・アスペクト」「II-d. 人称」「II-e. 対象」「II-f. ムード」の6つの問題点が明らかになった。

第8章では、中国語訳を作成した際の様々な翻訳上の問題点を明らかにした。「I 意味論的問題」には「やっちゃかね・やっちゃげね(役に立たない)」と中国語「不起作用」「不好用」「没用」の関係に見られるような「I-a. 方言のほうが中国語より意味範疇が広い」もの、「あんべわり(体調が悪い)」「いずい・えずい・えんつこい・えんつけあ・えんず(違和感がある、変な感じがする)」「にやにやする(胃腸に違和感がある、胃腸の調子が悪い)」「やばつい・やばち(湿って気持ちが悪い、水滴が付いて不快だ)」「やむ・やめる(病気になる、痛む)」が中国語では全て「不舒服」で表現されるというような「I-b. 方言のほうが中国語より意味範疇が狭い」もの、東北方言「きどころね(外出着を着たままうたた寝してしまうこと)」に相当する中国語の表現がなく、説明的な翻訳になってしまう例に見られる「I-c. 中国語に適切な語がなく説明的になる」ものの3つの場合が存在し、その他にも「II 意味論以外の問題」として「II-a. 発音規則」「II-b. 語順」「II-c. テンス・アスペクト」「II-d. 対象」「II-e. 印象」「II-f. 敬意」の6つの問題点が明らかになった。

第9章では、韓国語訳を作成した際の様々な翻訳上の問題点を明らかにした。「I 意味論的問題」には東北方言の接続助詞「～はんで・～はで(～(だ)から)」では区別されない前節と後節の「因果関係」を示す場合と「依頼・勧誘の理由と内容」の関係を示す場合を韓国語では前者を“~(다)때문에”、後者を“~(다)으니까”で区別するというような「I-a. 方言のほうが韓国語より意味範疇が広い」、もの、韓国語“타다”がかなり多くの意味を持ち、東北方言の複数の表現が一語で示されるというような「I-b. 方言のほうが韓国語より意味範疇が狭い」もの、東北方言「やばつい・やばち(水滴や湿気などで不快だ)」に対して韓国語の適語がなく説明的な翻訳になる例に見られる「I-c. 韓国語に適切な語がなく説明的になる」ものの3つの場合が存在し、その他にも「II 意味論以外の問題」として「II-a. 発音規則」「II-b. テンス・アスペクト」「II-c. ムード」「II-d. 敬意」「II-e. 対象」「II-f. 言い回し」の7つの問題点が明らかになった。

第10章では、インドネシア語訳を作成した際の様々な翻訳上の問題点を明らかにした。「I 意味論的問題」には東北方言「わんつか・わずか(少し)」とインドネシア語“sebentar”と“sedikit”の関係に見られるような「I-a. 方言のほうがインドネシア語

より意味範疇が広い」もの、インドネシア語“lucu”と東北方言「めごい・めんこい・めんけ・めげー（かわいい）」と「おもしえ（おもしろい）」の関係に見られるような「I-b. 方言のほうがインドネシア語より意味範疇が狭い」もの、東北方言「はなだんぼ（鼻にティッシュを詰めること）」に該当するインドネシア語の表現がなく、説明的な翻訳になってしまう例のような「I-c. インドネシア語に適切な語がなく説明的になる」ものの3つの場合が存在し、その他にも「II 意味論以外の問題」として「II-a. 発音規則」「II-b. 人称」「II-c. 対象」の3つの問題点が明らかになった。

第11章では、ポルトガル語訳を作成した際の様々な翻訳上の問題点を明らかにした。「I 意味論的問題」には東北方言「うつつあし・うっちゃし（うるさい）」とポルトガル語“barulhento”及び“chato”の関係のような「I-a. 方言のほうがポルトガル語より意味範疇が広い」もの、ポルトガル語“boa noite”が夕方以降の挨拶と就寝前の挨拶の両方を含むが東北方言では前者と後者を分けるといった関係に見られるような「I-b. 方言のほうがポルトガル語より意味範疇が狭い」もの、東北方言「かめっこ（人見知り）」に対応するポルトガル語の表現がなく、説明的な翻訳になってしまう例のような「I-c. ポルトガル語に適切な語がなく説明的になる」ものの3つの場合が存在し、その他にも「II 意味論以外の問題」として「II-a. 発音規則」「II-b. 語順」「II-c. テンス・アスペクト」「II-d. 人称」「II-e. 対象」「II-f. 言い回し」の6つの問題点が明らかになった。

以上第7章から第11章までに見られた翻訳上の問題点をまとめて表にすると、表1のようになる。

表1. 諸言語への翻訳上の問題点

I 意味論的 問題	I-a. 方言のほうが翻訳言語より意味範疇が広い
	I-b. 方言のほうが翻訳言語より意味範疇が狭い
	I-c. 翻訳言語に適切な語がなく説明的になる
II 意味論以外 の問題	II-a. 発音規則
	II-b. 語順
	II-c. テンス・アスペクト

II-d.	人稱
II-e.	対象
II-f.	ムード
II-g.	印象
II-h.	敬意
II-i.	言い回し

第 12 章では、本研究の結論を述べ、また、課題や展望についても記し、結びとした。

#### 4. 本研究の意義

本研究は、東北地方各地の外国人住民がすぐ使える、一目でわかる、音声も聞ける、分かりやすい、「最低限の方言理解」に資する方言集を作成し、東北地方各地の国際交流協会等に配布したため、様々な外国人住民、あるいは外国人住民に地元の文化として方言について教えようとする地域日本語教師の皆様の手に渡るようになっている。現在方言集を設置・配布してくださっている機関は以下の通り。

##### 青森県

- ・公益財団法人 青森県国際交流協会

##### 岩手県

- ・公益財団法人 岩手県国際交流協会
- ・奥州市国際交流協会
- ・金ケ崎町国際交流協会

##### 秋田県

- ・公益財団法人 秋田県国際交流協会

##### 山形県

- ・公益財団法人 山形県国際交流協会

福島県

・会津若松市国際交流協会

また、ウェブサイト版も存在するため、場所を選ばず使える。これらの方言学習環境を整えたことにより、外国人住民の生活の向上に一定程度寄与できたと考える。実際に、東北各地の国際交流協会から問い合わせや、喜びの声をいただいたことから、現在の機関に配布されている。

さらに、東北方言と諸言語を直接対照することによって、これまで見られなかった様々な問題点を明らかにできたことも本研究の意義と考える。標準語との対照があればいい、英語との対照があればいい、といった単純なものではなく、言語によって問題点は異なるということを示すことができた。

このように、日本人住民及び外国人住民への調査手法から、方言理解支援ツール作成の過程及びツールの特色、そして東北方言と各言語との直接的な対照研究による多言語訳の際の翻訳上の問題点などを記すことで、今後の他地域を含めた外国人住民への方言理解支援に関するテンプレートを示すことができたことは本研究において最も意義深い点であると考えられる。